

日韓文化交流基金NEWS

Contents

- 1 日韓国交正常化 50 周年を迎えて
- 2-3 青少年事業
韓国青少年団基交流訪日研修団
- 4-5 講演会
朝鮮通信使と徳川家康の平和外交
比較文化学者 金両基
- 6-7 フェロー研究紹介
韓国の多文化主義と結婚移住女性による文化表象
福岡女子大学国際文学部国際教養学科准教授 徐阿貴
- 8 助成事業
「未来塾ながの for Teachers」——長野県教員海外研修事業
長野県教育委員会事務局指導主事 横内佳代
- 9-11 日韓文化交流基金事業報告
- 12 日韓文化交流基金 賛助会員制度の御案内



公益財団法人 日韓文化交流基金 <http://www.jkcf.or.jp>

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号 虎ノ門ワイコービル4F Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326

2015.3.27
NO.

73

日韓国交正常化50周年を迎えて

当基金の活動が評価され「韓国日本学会賞」を受賞!

日韓文化交流基金は、1983年の創立より31年間、次代を担う日韓の青少年交流事業、有識者による文化・学会会議事業、中堅・若手研究者を対象とする研究支援(フェローシップ)事業、民間レベルにおける草の根交流事業など、多岐にわたる事業を展開してまいりました。これら地道な交流事業の努力が評価され、去る2月7日に「韓国日本学会賞(瑞松韓日学術賞)」*を受賞いたしました。本賞は当基金に対する激励と受けとめ、基金職員一同、韓国の期待になお一層応えるべく努力する所存です。

この50年間、日韓両国は紆余曲折を経ながらも、総じて相互の安全と繁栄のため、協力を積み上げてきました。他方、今世紀に入り世界は不透明感を増し、多くの地域で民族間や宗教間の対立や暴力が発生しております。また、最近の日韓関係は東アジア情勢が変化する中で、今までになく困難な状況にあります。日韓関係に大きなひびがはいることは、アジア情勢ひいては世界の平和にも悪い影響をもたらすでしょう。アジアの比重が高まる中で、日韓両国が過去の歴史や偏見を乗り越え、ともに協力し世界平和と安定に貢献することは、世界史的に重要な役割です。そのためには、息の長い地道な努力が不可欠です。とりわけ両国の感受性豊かな青少年が互いの違いを知り、互いの文化を尊重し理解する異文化交流の強化がこれまで以上に求められています。当基金はより発展的な日韓関係を醸造するため、引き続き、これまで培ったノウハウを生かし、時代に即した文化交流事業を行ってまいります。

今後の新たな50年に向けてスタートする年として、引き続き皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

*「瑞松韓日学術賞」は、韓国日本学会が、韓国と日本において相手国に対する学術研究と文化交流に寄与した個人または団体に感謝と激励の意を表するもので、2004年に創設された。今回で10回目である。

日韓文化交流基金理事長、小野正昭がエルエスエイチアジア奨学会「日韓国交正常化50周年記念講演会」にて『若者たちに今、経験してほしいこと、1+1≥2』をテーマに講演を行いました。当日の様子は、当基金HPで動画にてご覧いただけます。

アジア国際子ども映画祭参加訪日団

JENESYS2.0の一環として、アジア国際子ども映画祭(本選は2014年11月29日、兵庫県南あわじ市)に自作映画がノミネートされた韓国の高校生9名が、11月25日から12月1日までの6泊7日の日程で訪日しました。

アジア国際子ども映画祭は、子どもたちに映画制作を通じて、社会に出るまでの目標や目的、競争意識、自覚を持たせ、感受性豊かな人間に育てほしいという杉良太郎氏の想いから2007年度より開催されているプログラムで(韓国は2010年度から参加)、各国において選定された優秀な作品の制作者を招へい、作品を上映し、映画制作を通じた国際交流を行っています。

韓国からの出品作『空へ飛ぶ』が法務大臣賞受賞

11月29日、南あわじ市文化体育館を会場に、韓国を含むアジアの15の国・地域から映画祭参加者が集まりました。今年度の作品テーマは「わたしの夢」。日本や海外各国の青少年たちが、将来の夢やハンディを背負いながらもあきらめずに夢を追う姿などを描いた作品が上映されました。韓国からは3作品が本選に出品され、梅香女子情報高等学校の生徒が制作したアニメーション作品『空へ飛ぶ』が、応募作品数235作品の中から法務大臣賞を受賞しました。この作品は、主人公が幼いころ抱いた「鳥のように空を飛びたい」という夢を大人になってもあきらめず、忙しい日常の中で叶えていく様子を描いたものです。夢を抱き続ければいつかは叶うという、希望を持つことの大切さを訴えた内容です。表彰式のインタビューで受賞者の一人は、「将来は映像制作の仕事に携わりたい」との夢を語っていました。



受賞の発表に歓喜する参加者たち

アジア国際子ども映画祭参加訪日団の日程

一行は映画祭参加のほか、180年続く醤油製造元や宮崎駿作品の舞台のモチーフとなった狭山丘陵(トトロのふるさと基金「クロススケの家」)における緑化保全活動の見学、学校訪問等を通じて、日本の魅力に触れる体験をしました。埼玉県立芸術総合高等学校では絵画、ダンス、音楽などを専門から学ぶ授業の様子や実習を行う施設を見学、映像芸術科の「ビデオ表現」の授業にも

参加し、日韓の学生が制作したショートムービーを披露して感想を述べ合いました。また、日韓混成チームにより、日本語と韓国語で交互にしりとりをしながら、即興で映像作品を作るという交流も実施されました。こうした交流を通じて、映像の構成や表現などにおける日韓のちがいや発見があったようです。



日程

- | | |
|--------------------------------------|----------------------------------|
| 11月25日(火) | 28日(金) |
| 羽田空港着 | 淡路人形浄瑠璃見学、うすしお観潮船乗船、映画祭参加者交流会 |
| 26日(水) | 29日(土) |
| 埼玉県立芸術総合高等学校訪問、トトロのふるさと基金「クロススケの家」見学 | アジア国際子ども映画祭本選大会 |
| 27日(木) | 30日(日) |
| 川越城、川越市蔵造り資料館、松本醤油商店見学 | 神戸映画資料館、神戸北野地区異人館、神戸震災メモリアルパーク見学 |
| | 12月1日(月) |
| | 関西空港より帰国 |



様々な国からの映画祭参加者と交流

参加者の感想文

アジア国際子ども映画祭参加訪日団を終えて

梅香女子情報高等学校 金成河(キム・ソンハ)

日本……はじめは韓国とのあいだに高い壁がある気がしていたが今回の訪日経験を通じ、こうした私の考えは大きく変化させられた。日程2日目に訪問した埼玉県立芸術総合高等学校では「私たちにあまり関心を持ってもらえないのでは」といった訪問前の心配とは反対に、生徒も先生たちも温かく迎えてくれた。授業体験の交流ではお互いについて深く考えたり、親しくなる時間を持つことができ、日程が終わるころには、連絡先の交換をしたりして別れを惜しんだ。この交流で、日本に一步近づいた気分になった。訪日プログラムの中で最も記憶に残ったことは、15の国・地域の映画祭参加者たちとの交流である。お互いの国の文化等について話をする中で、言葉はうまく通じなくても、同じ訪日プログラムに参加した友人であるという思いが湧いてきた。訪日プログラムを終えてひと月以上たつ今も、そこで出会った友達とは連絡を取り合い、思い出を共有している。今回の訪日プログラムで得た経験を生かして、日韓が歴史的なことで縛られる関係ではなく、心が通じ合う関係となるよう、わずかながらも周りの人たちに日本の良い点を伝えていきたい。

韓国青少年囲碁交流訪日研修団

韓国青少年囲碁交流訪日研修団とは、2014年11月20日から27日まで、外務省が推進するJENESYS2.0の一環として訪日した韓国全土から選抜された韓国の大学生棋士27名です。一行は、日本滞在中、日本・韓国・中国の3か国の大学生による囲碁交流大会「日中韓大学生囲碁交流2014」に2日間参加したほか、囲碁ゆかりの地の訪問や学校・企業訪問、文化体験を通して日本の魅力を体感し、様々な交流を行いました。

研修日程

11月20日(木)

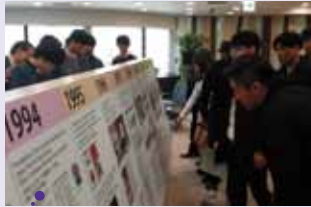
羽田空港着、東京タワー見学、研修に関するオリエンテーション

21日(金)

企業訪問(株式会社ぐるなび・ペア碁25周年パネル展)、着付け・茶道体験、歓迎昼食会

22日(土)

日中韓大学生囲碁交流2014(日中韓男女混合ペア碁・3人碁)に参加



23日(日)

日中韓大学生囲碁交流2014(国別対抗個人戦・日中韓混合チーム別連碁)に参加、日本棋院見学

24日(月)

広島県へ移動、尾道千光寺、因島水軍城見学、本因坊秀策囲碁記念館視察

25日(火)

広島平和記念資料館見学、お好み焼き作り体験、韓国人原爆慰霊碑献花、広島国際大学訪問

26日(水)

宮島・厳島神社見学、しゃもじつくり体験、感想報告会

27日(木)

関西国際空港より出国



参加者・関係者感想

この度、当基金としては初めてとなる囲碁交流は、大会への参加のみならず、さまざまな出会いや日本の文化体験、各種施設訪問などを通じた多様なものとなり、日本をさまざまな視野から見てもらえる研修となりました。その参加者の感想、そして囲碁交流主催者の感想をお伝えします。

研修参加者

右手前が筆者



金 成植(キム・ソンシク)

韓国明知大学校 囲碁学科2学年
韓国青少年囲碁交流訪日研修団 学生代表

子供の頃、日本を代表する棋士の棋譜を見ながら勉強をした私にとって、日本囲碁は憧れでした。機会があったらぜひ「日本」に行ってみたくて思っていたので、今回、そのような機会に恵まれ、非常に嬉しかったです。日韓文化交流基金主催の歓迎昼食会や囲碁交流など私には夢のような7泊8日でした。歓迎昼食会では、日本棋院の理事長、外務省の日韓交流室長、ペア碁協会の副理事など、普段はお目にかかれないような皆様と多くの話をしながら、日本と韓国の囲碁の話や日韓関係について語り合い、最近、日韓関係がよくないことなど忘れてしまうほど、一緒に笑い、会話が弾んだことが印象に残っています。また、「日中韓大学生囲碁交流2014」では、お互い言葉は通じませんでしたが、囲碁を通して親しくなり、帰国後も連絡を取り合っていて、「また機会があれば日本に遊びにおいで!」と言ってくれる日本の友達もでき、本当に意味のある有意義な時間でした。韓国にある「千里の道も一歩から」ということわざのように、日韓の多様な面からの交流を通し、広い分野で日本を紹介していけば、少しずつ大きな変化があるはずだと思います。最後に、このような素晴らしい機会をくださった日韓文化交流基金をはじめとする全ての関係者の皆様にお礼申し上げます。

日中韓大学生囲碁交流2014主催者

孔 令文(こう・れいぶん)

囲碁交流大会「日中韓大学生囲碁交流2014」主催団体「龍の子孫」代表。平成23年7月日本棋院日中交流特命棋士に就任。日本棋院東京本院所属プロ七段。



今回の囲碁交流大会「日中韓大学生囲碁交流2014」は、国を越えた友人作りの場を提供したいという強い願いのもと、外務省が推進するJENESYS2.0の交流事業として初めて開催されました。当日は学生達が積極的に交流できるよう各国の男女混合ペア碁を企画したところ、あっという間に場内は活気ある雰囲気になりました。言語や国籍は違えど、碁盤を通じてコミュニケーションが取れる——これこそがまさに「手談」と言われる囲碁の魅力ではないでしょうか。

囲碁は韓国と日本で古くから脈々と受け継がれてきた誇るべき共通の知恵文化です。一方で、両国間には歴史認識や領土問題などの政治的な軋轢も依然として根強く、時としてこの素



晴らしい共通文化が埋もれてしまうこともあります。私達の役割は、囲碁を通じて日韓両国がお互いの共通点にもっと目を向け、政治的な問題を越えた親睦関係を築けるようになることです。そのために、今後も様々な活動を続けていきたいと考えています。

朝鮮通信使と徳川家康の平和外交

日韓共同でユネスコ世界記憶遺産を目指そう!

韓国推進委員会委員の金両基先生にお話をうかがいました。

私と朝鮮通信使の歴史との出合いは、大学時代、東京の神田神保町、古書街であった。『臨時増刊 朝鮮號』(1910年11月刊)という日本歴史地理学会の機関誌を、たまたま本棚から手にとってページを開くと、朝鮮通信使の絵巻から転載した写真が目につき、その解説を読んだがさっぱり意味がわからなかった。

「国書を載せる轎」の絵をみると轎の後ろに馬に乗った武人も、「屋轎上の正使」の絵姿も朝鮮王朝時代の偉い人に見えた。朝鮮王朝時代の服装で堂々と轎(輿)に乗っている人を担いでいるのは、紛れもなく日本の侍。関連する本文のページを開くと「江戸時代に於ける朝鮮使節の来朝に就いて」(藤田進)、「徳川時代初期に於ける日韓の関係」(辻善之助)という論文に出あった。朝鮮使節とはなにか、江戸時代に両国が交流していたのかと自問自答してみたが、答えが出ず、両氏論文の内容は理解出来ず本棚に戻した。

10数年後、ソウルの古書街である仁寺洞(現在は観光の街)の古書店で、その本の写真コピー本に偶然出あった。辻・藤田の論文を立ち読みして、豊臣秀吉の武力外交、徳川家康の平和外交・平和主義といった文言に再び出あい、その本を購入した。不思議な縁を感じて韓国の大学の若い韓国史学者に朝鮮使節や国書、家康の平和外交などについて聞いてみたが、質問の意味すら理解してもらえず、答えは得られなかった。

そこで1945年8月15日の解放(光復)直後から10年ほどの間に刊行された朝鮮(韓国)史の本を開いて朝鮮通信使の単語探しを始めた。解放後の最初の自国史である崔南善の『国民朝鮮史』に、秀吉の死後、家康が朝鮮に講和を求めてきたので、宣祖王40年(1607)に国交を回復し、その後200年間平和な関係が続いたと書いている。そのくだりはたったの3行で、通信使という表現はないが、両国は200年間平和が続いた、と書いてあった。



講師の話に真剣に聞き入る参加者の皆さん。
朝鮮通信使への関心の高さがうかがえる情景。

このように、朝鮮通信使は植民地時代に歴史の表舞台から消されていたことを知り、日本の画家が画いた当時の朝鮮通信使の絵巻などを見て関心を深めていた。そして1987年、静岡県立大学赴任を期に、通信使の文化遺産を多く保存している静岡県清水市興津の清見寺を初めて訪ねた。その翌年の88年、ソウルオリンピックが開催され静岡の某テレビ局が「日韓テレビブリッジ」を企画した。コーディネータとキャスターを務めることになった私は、仮設舞台に清見寺所蔵の通信使文化遺産を映写することを提案した。提案は通ったが、当日映写はされなかった。テレビ局の現場が通信使のことを全く知らなかったのも、映像を撮りに行かなかったのである。

朝鮮通信使は、家康が秀吉の侵攻による文禄・慶長の役(壬申丁酉再乱)以降、断絶状態にあった朝鮮王朝との国交回復を発信し、1607年(慶長12年)、第1回使節団が日本を往還した。一行は江戸からの帰路、家康が大御所として居城していた駿府城に招かれて大歓待される。そういう貴重な歴史が埋もれていることを知って、東海道は朝鮮通信使の往還によって国際ロード・文化歴史ロード・芸術ロードとして発展に大きく寄与したと私は喧伝するようになった。



2007年の『静岡朝鮮通信使再現行列』の様子。
沿道の人々から盛大な拍手を浴びた。

静岡県が主催する「2001年東海道400年記念事業委員会」が発足したとき、実行委員に選ばれた私は委員会が朝鮮通信使再現行列を提案した。市民団体「静岡に文化の風を」の会が支援金を得、その支援金とさらに寄付金を募って静岡で第1回目の朝鮮通信使再現行列が実現する。私が正使を、小嶋善吉静岡市長が將軍の役を任された。その後、数度再現行列を展開し、2007年に静岡県・静岡市・日本市民・在日コリアンが共同で「朝鮮通信使400周年記念事業実行委員会」を発足させ、私は実行委員長に任ぜられることとなった。土曜日は駿府城で石川嘉延県知事が、翌日の日曜日は清見寺で小嶋善吉市長が將軍の役



講師自身が時代考証をして、国書載せた輿を再現。
再現された輿の前に、清見寺内で講演を行った。

どころをそれぞれ演じた。晴天に恵まれ、大成功の声が木霊し、韓国や県外にも、「静岡朝鮮通信使再現行列」が喧伝され定着したのである。

徳川家康は関ヶ原の戦いに勝った直後、秀吉の武力侵攻で断絶していた朝鮮王朝との国交回復を対馬藩主の宗義智に内々に命じ、宗義智は家康の名で朝鮮王朝に要望した。「日本朝鮮和交の事古来の道。然るを太閤一覽の後その道絶しぬ。通交は互いに両国の為なり。先ず対馬より内々書を遣わし尋ね試み、合点すべき意あらば、公儀よりの命ともうすべしとあるほどに、対馬より私かに書を渡す。」「通航一覽」

朝鮮王朝では対馬藩の再三再四の要望に、Ⅰ：(その旨の)国書を寄こし、Ⅱ：戦争時、朝鮮王朝の王陵を盗掘した犯人を差し出し、Ⅲ：拉致した人々を帰還させる、という3つの条件を提示した。

それを受けて対馬藩は徳川家康の名を使って国書を書き、偽の犯陵を二人差し出し、拉致していた人々を多数帰還させた。朝鮮王朝は対馬藩から伝えられた国書と犯陵が偽物であることを察したが、書式や形式は整っていたのでこれを黙認し、また犯人でないと言い張る二人には「憎むなら己たちを寄こした自国(日本)を憎め」といって宣祖王が直々に裁き、犯陵は処刑された。そして日本の実情を調べるために松雲大師を正使とする使節団(探賊使)を対馬に派遣する。松雲大師は幕府の要望で1605年、伏見城に赴き大御所徳川家康と会談。二人の間に信頼関係が芽生える。そして1607年、第1回目の総勢500人からの通信使が往還し、以来徳川幕府265年間、両国の国家的摩擦はなく、平和時代が続いたのである。

私は「家康公と松雲大師の二人の出会いが通信使を生んだ」と言い、静岡の興津での再現行列でその語録を常用している。が、対馬藩が徳川家康の名で朝鮮王朝に伝えた国書は偽物であり、初期の国書も改竄されたという批判・指摘が日本側にある。家光の時代、対馬藩の内紛で、家老の柳川調興は藩主の宗義成が国書を改竄したと幕府に告発、家光が江戸城で直々に裁く。家光は「井伊尚高・土井利勝・松平信綱に命じて双方の云分を取り調べさせた。(中略)將軍家光は三家を始め、諸大名を登城せし

め、義成と柳川とを対決せしめ、將軍自らこれを裁決した。(中略)幕府と朝鮮の間に立って、国書を改竄し、其他種々私曲を働いていた事が、悉く暴露した。其結果、義成は許され、柳川は津輕に、方長老は南部に、呆首座は秋田に流され(中略)、これでこの一件が終わった」(「徳川時代初期に於ける日韓の関係」(辻善之助稿)

家康の名で朝鮮王朝に伝えた国書の偽造、そして改竄も江戸幕府の内部問題であり、それが両国の国際摩擦になったことはない。徳川幕府時代、両国は平和な善隣友好時代を築いたのである。

おもてなしからその様子がうかがえる。神に供える神饌、最高の七五三膳・五五三膳でもてなし、駿府城で家康に歓待される前日折戸湾に豪華船を五艘遣わして家康は一行を歓待した。ユネスコの世界遺産登録にふさわしい歴史遺産である。



懇談会の席であいさつする金両基講師。
後ろは朝鮮通信使に深い関心を寄せ、関連事業なども行っている参加者たち。

PROFILE



金 両 基

1933年、東京生まれ。早稲田大学文学部卒。号・白翔、哲学博士、評論家。韓・米の大学教員を経て、1987年に外国人として初めての日本の国公立大学専任教授となる静岡県立大学教授に就任。定年後、常葉(とこは)学園大学教授、赴任大学の大学院教授を兼任、などを歴任。1979年、文化庁芸術祭優秀賞、1984年、ラジオたんぱ第1回アジア賞、1995年、韓国放送公社第3回KBS海外同胞賞、2002年、韓国政府から文化勲章、2004年、静岡県知事表彰などを受賞。信濃毎日新聞でコラムニストなど、紙誌で執筆。「朝鮮の美はすべて悲哀の美である」という戦前からの説を正し、「韓国の美は楽天的な自然性の美である」を提唱、認められる。著書は『キムチとお新香〜日韓比較文化考』『海峡を越えられるのか 日韓歴史論争』(櫻井よし子と共著)、『日本の文化 韓国の習俗 比較文化論』、キネマ旬報『韓国の歴史』総監修、など多数。朝鮮通信使に関する講演・論考多数。朝鮮通信使世界記録遺産韓国推進委員会委員。

韓国の多文化主義と結婚移住女性*による文化表象

1. 結婚移住女性の増加と多文化政策

1990年代以降韓国は、周辺のアジア諸国からの人口流入によって急速に多様化が進んだ。登録外国人数は約157万人(2014年、安全行政部)、人口に占める割合は3.14%である。カテゴリーとしては、外国人労働者が3分の1を占め、外国籍同胞(23万人)、結婚移民(24万人)等となっている。出身は、朝鮮族を含む中国が約半数を占め、ベトナム、フィリピン、日本、アメリカ等である。

急速な移民増加に対し、韓国政府は2000年代より、「多文化」を理念とする社会統合政策を推進するようになった。西欧諸国の多文化主義的な政策が、基本的に、エスニック・マイノリティのコミュニティや個人に対する言語文化的要素の保護と継承のための施策であるのに対し、韓国の「多文化政策」は、結婚移住者(8割が女性)とその家族を主たる対象とする。数量的により大きな集団である移住労働者ではなく、結婚移住女性が政策対象とされた理由は、結婚移住女性は、今後も韓国に住み続ける人々とされ、将来の韓国民を生み育てるという観点から、社会統合を要すると考えられたためである。その背景には、2005年に出生率1.08を記録したほど深刻な少子化があり、多文化政策は家族政策と一体のものとして展開されてきた。

2. 他者化される結婚移住女性

かつて韓国への結婚移民者は日本人女性が多く、続いて中国朝鮮族という「同胞女性」が増加したが、近年結婚移民者の出身地は東南アジアや中央アジア、ロシア等に広がっている。この変化は、結婚移民者を〈人種〉カテゴリーとして可視化させた。その結果、韓国における多文化プロジェクトの多くは、〈多文化女性〉と言い換えられた結婚移民者が、「非韓国的」な文化的要素を強調され、他者化につながった。テレビや映画、インターネットといったメディアにおける結婚移住女性のイメージは、偏見によってゆがめられ、ステレオタイプ化されていることが多い。「普通の韓国人」との異質性が強調される一方で、彼女たちが韓国語や風習の習得に心を砕き、家族に溶け込み妻、母、嫁役割を果たそうと一生懸命である姿が評価される。賞賛であったとしても、常にマジョリティの視線にさらされることで、行動や思考、感情まで支配されがちである。

こうした状況に対し、近年は結婚移住女性を担い手とした主体的な文化表象が、さまざまな形で展開されている。それは、マジョリティが好む結婚移住者のイメージと現実の乖離を埋めようとする、当事者による抵抗実践として注目に値する。以下にその一部を紹介したいと思う。

3. 映画、演劇の作り手として

ソウル国際女性映画祭(International Women's Film Festival in Seoul, IWFFIS)は、女性が制作した、女性をテーマとする映画を、女性が鑑賞し批評する空間であり、世界最大の国際女性映画祭である。プログラムのひとつに、移住女性が直接語る映像を制作する「多文化メディア・アカデミー」がある。フェミニズムの視点によるビデオ・アクティビズムであり、主流のメディアでは無視されがちな移住女性の意見を映像によって伝えるものである。短編映画の制作と、結婚移住女性を現代フェミニズムの課題として捉えなおす人文学講義を内容とする。結婚移住女性の目を通した、家族や子ども、学校(先生や保護者が描かれる)、地域に住む人々、入国管理事務所職員など、女性たちの日常生活を構成する人々が描かれた作品は、女性映画祭で上映され、会場に集まった移住女性や運動家、研究者が議論する。2012年にフィリピン出身の結婚移住女性が制作した作品「聞きたくなくても最後まで聞かなければならない歌」は、異邦人である孤独、人種差別への怒り、子どもや夫との親密だがわかりあえない関係から来る葛藤を、軽妙なK-Popの替え歌で表現したもので、好評を博した。

また劇団サラダは、韓国人と移民から構成される演劇集団である。韓国社会で移民が直面する問題や葛藤を、言葉や舞踊に乗せてわかりやすく表現する。韓国人の夫と姑と暮らす結婚移住女性の葛藤を描いたコメディや、母親がフィリピン出身であることでいじめを受ける子どもがアイデンティティを獲得していく過程を描いた作品がある。新韓銀行等の支援を受けており、学校公演を中心に啓発活動を行っている。



多文化メディアアカデミー上映会

4. 結婚移住女性のコミュニティ

韓国では、結婚移住女性を中心とする組織が多数形成されている。そのひとつである仁川市のアイダ・マウルは、「女性の電話」という性暴力撲滅運動を推進する女性運動団体が母体となっ

た、アジア出身の結婚移住女性たちのコミュニティである。仁川市に住むベトナムや中国、フィリピン、日本などさまざまな結婚移住女性たちが集い、エスニック・レストラン「Sister Food」や作文プロジェクト「カメレオンの眼」、ダンス公演等の活動を行っている。フィリピン女性のダンス・チーム「タマヤン」は、子どもがフィリピンの文化に親しむ機会を提供している。



タマヤンの公演



アイダ・マウル作文集

各種イベントでの招待公演は高い評価を得ている。食べ物やダンス等の出身地の文化の紹介、故郷の思い出や韓国での生活で感じたことを韓国語と絵で表現した本の刊行も、地域社会との積極的なコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。

5. 多文化家族支援センターでの結婚移住女性の活動

多文化家族支援センターは、結婚移民者の安定的な韓国社会への定着を推進し、家族が安全に暮らせるよう支援することを目的とする、女性家族部が統括する機関である。中心的事業は韓国語教育と相談業務だが、結婚移住女性を中心とする自助グループを奨励している。自助グループとは、困難を抱える人々が、問題共有や経験のシェア、解決に向けた相互扶助を行う集まりである。多文化センターの自助の集いは、先に移住した女性がセンターとなり、後から移住した女性を助けるしくみである。自助グループは、移住女性がアイデンティティを形成する社会的基盤となることが期待されている。自助グループの内容は、出身地や韓国の伝統的な舞踊、K-Popやナンタといったパフォーマンスや、料理など多彩な文化活動である。家族の中では、料理など故郷の文化の実践が難しいが、出身を同じくする女性の自助の集いでは気兼ねなく文化の実践ができる。さらに家族や地域社会の人々に故郷の事物を積極的に紹介することで、結婚移住女性が自身の立場に自信を持つようになる。

女性財団(韓国の女性団体に助成を行う団体)は、文化的多様性のための多文化女性コミュニティ支援プログラムを行っている。

約10の移住女性コミュニティを支援しており、その約半数は多文化家族支援センター内の自助の集いによる文化活動である。

6. 下からの多文化主義

以上、結婚移住女性による近年の文化活動の一端をご紹介した。伝統舞踊や食といった「文化」の内容は、マスメディアで断片的に描かれる〈多文化女性〉に付された「異文化」と一見させて変わらない。しかし女性たちは、韓国社会による〈多文化〉ブームに乗っかりながら、文化活動を主体的に行うことで、多文化・多民族的な韓国社会の作り手として自己を提示しようとしているように見える。政策という「上からの多文化主義」に対し、女性たちは文化の領域での実践を通じ韓国社会における肯定的なアイデンティティを形成しており、「下からの多文化主義」の展開として興味深い。

これらの活動の多くは、既存の女性運動との連携を基盤としている。そこにみるトランスナショナルな女性連帯は、韓國人を「先住民」と呼ぶことで、マジョリティ=マイノリティ関係の相対化をはかろうとしている。「下からの多文化主義」が今後どのような方向に展開していくか、注目していきたい。



韓国女性財団が支援する多文化女性コミュニティ発表会

*結婚移住女性とは、韓国人男性との結婚を通じて韓国に移住した外国出身の女性を指す。

PROFILE



ソ ア キ
徐阿貴

神奈川県に生まれる。専門は国際社会学、移民女性研究。在日朝鮮人1世女性による運動研究により2012年、山川菊栄賞を受賞。お茶の水女子大学、梨花女子大学研究員を経て、2014年より福岡女子大学国際文理学部准教授。

「未来塾ながの for Teachers」——長野県教員海外研修事業

長野県教育委員会事務局 教学指導課高校教育指導係 指導主事 横内佳代

「未来塾ながの」とは

長野県教育委員会では、平成20年度より県内企業や大学等と連携し、高校生のキャリア教育プログラム「未来塾ながの」を実施してきました。これは学校の外での様々な体験・人との出会いを通して、未来の信州を担う人材を育成することを目的とした事業です。昨年はJENESYS2.0プログラムとリンクさせた韓国研修を実施、県内46名の生徒たちが韓国へ行く機会を得ました。公的機関や企業等の見学に加え、韓国の高校生との授業体験やホームステイ、文化体験など充実したプログラムで、生徒たちはマスコミで伝えられる情報だけでは到底知りえない韓国文化の素晴らしさを体感することとなりました。生徒たちは今もネット等で交流を続けていますが、私たち教育委員会もまたこの時お世話になった京畿道の眞乾高等学校、梅香女子情報高校の先生方と「ぜひ来年も会いましょう」と約束をし、以後交流に向けてやり取りを続けています。

今年度は日韓文化交流基金より助成金を得て、長野県側11名、韓国側11名の計22名の教員が互いの国の高校や教育委員会を訪問し、大変有意義な研修を実施することができました。またプログラムの企画・立案にあたっては、日本大使館公報文化院の皆様にご貴重なアドバイスをいただきました。この場をお借りして関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

韓国・京畿道での研修

韓国では主に、日本よりも進んでいるといわれる外国語教育とICT教育について視察・研修を行いました。上記2つの高校に加え、語学とツーリズムに特化した教育課程を持つ韓国観光高校での視察も行いましたが、目的を持って入学してくる生徒たちの高い語学力に圧倒されました。また京畿道教育庁を訪問し、韓国の抱える教育問題や、解決に向けた革新学校の取組等について胸襟を開いてご説明いただき、韓国の教育事情について理解を深め、共通の課題について共に考えることができました。なお、研修に参加した2名の外国語科教員が、眞乾高校にて、韓国の先生と共に英語の授業を担当させていただいたことも大きな収穫でした。



①日韓の教員と一緒に世界遺産見学
②京畿道教育庁にて
③韓国観光高校の生徒さんたちと

長野県での研修

日本での研修は、韓国の先生方の今一番の関心事である、日本の「キャリア教育」と、生徒たちの放課後の「クラブ活動」について、視察・研修を行いました。受験競争が過酷な韓国では今、進路探求型学習への転換を模索しているとのことですが、共に研修をする中で互いの社会事情や考え方の違いについても明らかとなったかと思います。「日本人は古いものも大切に使っている点は素晴らしい、でももう少し最新のものに思い切って投資をする必要があるのではないか」、あるいはクラブ活動に関して「生涯にわたって楽しめ、心を豊かにしてくれるスポーツや文化・芸術活動は有用である、韓国でもぜひ取り入れたい点だ」とのご指摘の中で、その意義を改めて再認識したりと、私たちも新たな視点をたくさんいただきました。日韓の教員同士がお互いにざっくばらんに教育について語り合えた機会は本当に貴重であったと思います。



韓国の先生方に長野県の総合文化祭を 松本城の鎧武者と韓国の先生方
見学していただきました

平成30年度に向けて —全国高等学校総合文化祭の開催—

さて、3年後の平成30年(2018年)に、全国高等学校総合文化祭が長野県で開催されます。国際交流部門では韓国の高校生との交流も計画しています。平成27年は、美術・工芸分野への進路を志す生徒たちの、日韓でのアート交流を企画しているところです。日韓関係は冷え込んでいると言われますが、市民や地方自治体レベルでの文化交流は静かに深まりを見せています。高校生の日韓交流は、グローバル時代にふさわしい多様性や協働性を育てるチャンスと考えます。特に若い世代の互いの国に対するイメージは多面的・多角的であり、先入観にとらわれずに言葉の壁を乗り越え、芸術表現での交流を行ってほしいと願っています。今年は日本と韓国の国交正常化から50年の節目の年にあたりますが、こうした地道な草の根交流の積み重ねが互いの理解につながると信じて、これからも交流して参ります。

PROFILE

横内 佳代

長野県教育委員会事務局 教学指導課高校教育指導係指導主事。
専門教科は地歴公民(日本史)。交流を通して韓国に友人がたくさんできたことは、私の人生を豊かにしてくれています。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2014年度第3四半期(2014年10月1日から12月31日まで)の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

次代を担う日韓の青少年を対象に、相手国の社会の実情にふれ、人々との対話を行いながら相互理解を深めていくため、招へい・派遣プログラムを行っています。

訪日団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	主 な 訪 問 先
韓国大学生 (第3団)	徐東喆(ソ・ドンチョル) グローバルサイバー大学校主務官	30	8	22	10/21～ 10/30	愛知県稲沢市、上智大学、立命館大学
韓国大学生 (第4団)	金仁姫(キム・インヒ) 国立国際教育院教育研究士	30	11	19	10/21～ 10/30	滋賀県大津市、青山学院大学、 京都産業大学
外務省招へい 大学生	宋秀賢(ソン・スヒョン) 大韓国外交部 文化外交局文化交流協力課3等書記官	30	12	18	11/4～ 11/13	大阪府大阪市、拓殖大学、大阪大学
団体名	団 長	計	男	女	期 間	主 な 訪 問 先
高校生 (第1団)	李敬容(イ・ギョンヨン) 土坪高等學校校長	50	24	26	10/18～ 10/27	熊本県天草市、熊本県立天草高等学校
高校生 (第2団)	田甲賛(チョン・カプチャン) 京畿道教育庁奨学官	49	20	29	10/18～ 10/27	鹿児島県日置市 鹿児島県立串木野高等学校
団体名	育 庁 奨 学 官	計	男	女	期 間	主 な 訪 問 先
高校生 (第3団)	李淙龍(イ・ジョンヨン) 京畿道教育庁国際交流協力チーム長	50	20	30	11/6～ 11/12	岡山県岡山市 東京都立三鷹中等教育学校 岡山県立岡山城東高等学校
高校生 (第4団)	金學鎮(キム・ハクジン) 蔚山女子商業高等学校 校長	50	19	31	11/6～ 11/12	奈良県奈良市 青山学院高等部 奈良大学附属高等学校



着物を着て
生け花体験
(大学生訪日第3団)



おばんざい作り体験
(外務省招へい
大学生)



串木野のさ
踊り体験
(高校生訪日第2団)



奈良県の
大学生との交流
(高校生訪日第4団)

訪韓団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	主 な 訪 問 先
日本教員 (第2団)	遠藤大輔 那覇市立神原中学校 教諭	20	10	10	11/18～ 11/27	サントン初等学校、シムウォン高等学校 チョンワン中学校
団体名	団 長	計 ^{※1}	男 ^{※2}	女 ^{※2}	期 間	主 な 訪 問 先
福島県いわき 市中学生	鈴木和美 いわき市総合教育センター 所長	50	18	27	10/5～ 10/11	ソンサ中学校
岩手県高校生	菊池郁聡 岩手県立久慈東高等学校 副校長	50	6	39	10/19～ 10/25	漢陽大学校、土坪高校
群馬県高校生	杉山昌広 群馬県立吉井高等学校 教諭	50	19	31	11/16～ 11/22	韓国観光高等学校

※1 引率含む ※2 生徒のみ



観光実務の授業体験(群馬県高校生訪韓団)



ホストファミリーとお別れ(教員訪韓団第2団)



セウォル号合同焼香所にて(教員訪韓団第2団)



伝統衣装体験(福島県いわき市中学生訪韓団)

2 第14回日韓歴史家会議*開催

本会議は、2014年11月7日(金)から9日(日)の3日間、「世界史認識における‘アメリカ’の問題」というテーマのもと、TKP品川カンファレンスセンターにて開催されました。初日には古田元夫東京大学大学院総合文化研究科教授、劉仁善前ソウル大学校東洋史学科教授が記念講演を行い、翌日からは「世界史認識におけるアメリカ大陸の位置をめぐる」「アメリカ合衆国とアジア合衆国からの視点」「アメリカ合衆国とアジア東アジアからの視点」という3つのセッション別に行われた報告と討論において活発な議論が展開されました。

*この会議は、2001年に日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として発足。日本史、韓国史のみならず、幅広い分野の歴史研究者が年1回の会議に参加し、最新の歴史研究の成果をもとに意見交換と討論を行っています。



日本側参加者

飯島みどり／立教大学／ラテンアメリカ近現代史・イペリアーアフリカ関係史
飯島 渉／青山学院大学／医療社会史
板垣雄三／東京大学／イスラーム史
遠藤泰生／東京大学／北アメリカ史、地域文化研究
糟谷憲一／一橋大学／朝鮮近世・近代史
菅 英輝／京都外国語大学／国際関係論、アメリカ関係史
城戸 毅／東京大学／イギリス中世史
木畑洋一／成城大学／国際関係史
小檜山ルイ／東京女子大学／アメリカ社会史・日米比較文化
佐々木一恵／法政大学／アメリカ文化・思想史
佐々木隆爾／日本大学／日本現代史

鈴木 茂／東京外国語大学／ブラジル史
滝田賢治／中央大学／アメリカ外交・国際政治
中野 聡／一橋大学／環太平洋国際史・米比関係史・日比関係史
長田彰文／上智大学／東アジア国際関係史・日韓関係史・日米関係史
濱下武志／東京大学名誉教授／アジア近代史
松尾文夫／共同通信／アメリカ研究
古田元夫／東京大学／ベトナム現代史
古矢 旬／北海商科大学／米国政治外交史
宮嶋博史／成均館大学校／朝鮮史
矢口祐人／東京大学／アメリカ研究
油井大三郎／東京女子大学／アメリカ現代史

韓国側参加者

金 南 均／平澤大学校／アメリカ史（アメリカ外交史）
金 徳 鎬／韓国技術教育大学校／アメリカ史
金 伯 哲／ソウル大学校／韓国史（朝鮮時代史）
金 瑋 中／全南大学校／アメリカ史（アメリカ外交史）
金 榮 漢／西江大学校／西洋思想史
朴 檀／西江大学校／フランス現代史
裴 京 漢／新羅大学校／中国現代史（政治、思想史）

裴 永 洙／ソウル大学校／西洋現代史（アメリカ史）
延 敏 洙／東北亜歴史財団／日本古代史
劉 仁 善／ソウル大学校／ベトナム史
李 鍾 國／東北亜歴史財団／日本政治外交
李 泰 鎮／ソウル大学校／韓国史（政治、社会史）
鄭 文 祥／嘉泉大学校／中国現代史
車 河 淳／西江大学校／西洋思想史

3 学術定期刊行物助成

人文社会科学分野の学会・研究会の研究成果として刊行される学術定期刊行物を支援する事業です。2014年度助成対象団体より、次の研究成果物が刊行されました。

- 『韓国朝鮮の文化と社会 第13号』（韓国・朝鮮文化研究会編、株式会社風響社）
- 『現代韓国朝鮮研究 第14号』（現代韓国朝鮮学会編、中西印刷株式会社）



『現代韓国朝鮮研究 第14号』 『韓国朝鮮の文化と社会 第13号』

◆韓日文化交流基金訪日団◆

日韓文化交流基金の韓国内のカウンターパートである韓日文化交流基金(会長:李洪九元國務總理)の役員一行が11月27日から30日までの4日間訪日しました。

去る2013年に日韓、韓日両基金が創立30周年を迎えたことを踏まえ、初日の27日には、日韓文化交流基金の役員・評議員も参加して、両基金のこれまでの活動を振り返り、今後の事業の方向性について議論する「懇談会」を開催、熱心な議論が行われました。懇談会の後には、日韓文化交流基金鮫島会長の主催による歓迎晩餐会を開催しました。

〈参加者〉

李相禹(韓日文化交流基金 理事長、新アジア研究所所長)
李大淳(韓日文化交流基金 理事、韓国大学法人協会会長)
李在春(韓日文化交流基金 理事、元駐ロシア大使)
金容徳(韓日文化交流基金 理事、ソウル大学校名誉教授)
金秀雄(韓日文化交流基金 理事・事務局長)
孫承喆(韓日文化交流基金 運営委員、江原大学校教授)
趙星元(韓日文化交流基金 運営委員、KBS記者)

日韓文化交流基金 賛助会員制度の御案内

日韓文化交流基金 30 周年記念
「日韓文化交流基金 30 年史」を
新規入会の方全員に贈呈いたします。

日韓文化交流基金は1983年の創立以来、両国国民間の相互理解と信頼を深めるため、青少年交流をはじめ数多くの事業を実施しております。2012年には公益財団法人として新たなスタートを切り、従来以上に未来志向の日韓関係構築に向けて一層の努力を傾注しているところでございます。

こうした活動のために、当基金では賛助会員制度を設け、趣旨に御賛同頂ける多くの方々の御支援を賜りながら、更なる事業活性化を図っていく所存でございます。

賛助会員の皆様には特典といたしまして、広報誌『日韓文化交流基金NEWS』（季刊）及び、当基金が実施する講演会をはじめとする各種催しの参加案内をお送りいたします。また、日韓文化交流に関するニュースやお知らせなどを、メールマガジンでお届けいたします。新規入会の方には2014年度に当基金創立30周年記念として刊行した「日韓文化交流基金30年史」を贈呈いたします。

皆さまのご入会を心よりお待ちしております。

■ 頂いた会費は講演会や助成事業などに使われます

会員の方々から頂いた会費は、当基金主催の講演会と民間交流団体への助成事業経費の一部に充当されています。該当事業につきましては年度毎に御報告いたします。

2014年度の講演会と助成事業について御紹介いたします。

〈講演会〉

2014 年度講演会		
2014 年 6月26日	「韓国民話の世界」	金基英 韓国民話の語り部
2014 年 9月26日	「教授は踊る－伝統舞踊修業を通して得た日韓文化交流の秘訣」	大澤文護 千葉科学大学教授
2014 年 12月8日	「朝鮮通信使と徳川家康の平和外交」	金両基 比較文化学者・評論家

〈助成事業〉

『韓国朝鮮の文化と社会 第13号』『現代韓国朝鮮研究 第14号』の2点に助成いたしました。詳しくは本誌p11「日韓文化交流基金事業報告 3 学術定期刊行物助成」をご覧ください。



「韓国民話の世界」(2014/6/26)講演風景。民話の主人公の気持ちを熱演しながら聴衆に語りかける金基英講師が会場を沸かせました。

■ 入会のご案内

○年会費

- (1)個人会員 1万円
- (2)特別会員 3万円
- (3)法人会員 5万円

※1口以上何口でもご加入になれます。
会員期間は、会費の入金日から1年間です。

○年会費のお支払方法

- (1)郵便振替
口座番号 00160-9-668460
口座名称 公益財団法人 日韓文化交流基金
- (2)銀行振込
ゆうちょ銀行 〇〇八(ゼロゼロハチ)支店(普通)
口座番号 8505617
名義 公益財団法人 日韓文化交流基金
フリガナ ザイニッカンブンカコウリュウキキン

※手数料は当基金で負担いたします

●当基金ウェブサイトの賛助会員制度のページに賛助会員制度申込みフォームがありますので、そちらに必要事項を御入力の上、ご入会下さい。

○お問い合わせ・資料のご請求

公益財団法人 日韓文化交流基金
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-12-1 虎ノ門ワイコービル4F
Tel 03-5472-4323 / Fax 03-5472-4326
E-mail membership@jkcf.or.jp
ウェブサイト http://www.jkcf.or.jp

■ 2014年12月31日現在 賛助会員リスト

(五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)
ご厚意に深く感謝申し上げます。

特別会員 6人

小野正昭 金春美 徐正基 中江新 橘崎正博
渡辺浩

個人会員 81人

秋鹿敏雄	饗庭孝典	青野正明	秋月望	朝海和夫
朝倉敏夫	浅野豊美	阿部孝哉	天江喜七郎	李仁子
李炯喆	石川武敏	磯崎典世	林在圭	内田富夫
梅田博之	大竹洋子	荻野綱男	小倉紀蔵	生越直樹
越智通雄	梶谷崇	加藤章	姜英淑	菅野修一
木畑洋一	木宮正史	黒柳慶子	小泉勇治郎	
日本民芸館館長	深澤直人	後藤利雄	小針進(2)	小林直人
齋木崇人	坂井俊樹	酒勾康裕	櫻井浩	佐島顕子
鮫島章男(2)	重家俊範	柴公也	十五代 沈壽官	上保敏
澤岡泰子(2)	白川豊	須川英徳	芹川哲世	千玄室
高田加代子	竹内宏	田中正敬	月脚達彦	都恩珍
中川聡	中塚明	中野照男	中山隆夫	中山武憲
中山めぐみ	並木正芳	芳賀徹	波田野節子	浜之上幸
林和彦	林史樹	韓泰文	福原裕二	藤本幸夫
藤原祥二	堀泰三	洪宗郁	前田二生	松井貞夫(2)
實生泰介	茂木敏夫	山口晃	油谷幸利	尹明憲
余田幸夫(2)	柳震太	和田とも美		

法人会員

真露株式会社 代表取締役社長 楊仁集